被害体験の有無と重要度についてははっきりした関連が認められなかったが、被害不安の高低に関しては、いくつかの違いが認められた。被害不安別重要度の平均を図４－１０に示した。学業達成、職業達成においては差は顕著ではなかったが、家庭的な成功において高不安群がより重要視している傾向が認められた。生活上の不安を強く持っている群では、家庭的な幸福を大事に考えており、それゆえに生活上の不安も強く感じられるのであろう。

５．逸脱行為と時間的展望との関係

本調査では、先行研究を参考にして以下のような方法で青少年の時間的展望について調査した。　縦５cm、横約４０cm の横長の四角の箱を示し、箱の左端を誕生、右端を死、箱全体を人生全体と考え、その箱の中に自分の人生で重大と思われる出来事を５～１０個程度書き込むように指示した。さらにその後、現在、現在から半年前と半年後、現在から３年前と３年後がどこに位置するかを箱の下部に記号で示すように指示した。このような手続きによって、箱を人生全体と考えたとき、人生を誕生から今から３年前まで、３年前から半年前まで、半年前から半年後まで、半年後から３年後まで、３年後から死までの５つの時期に区分することができる。この５つの時期をそれぞれ遠い過去、近い過去、現在、近い未来、遠い未来と呼ぶことにする。これら５つの時期の分けたときの相対的な時期の長さ及びそれぞれの時期に書き込まれた出来事の数を指標として用いた。

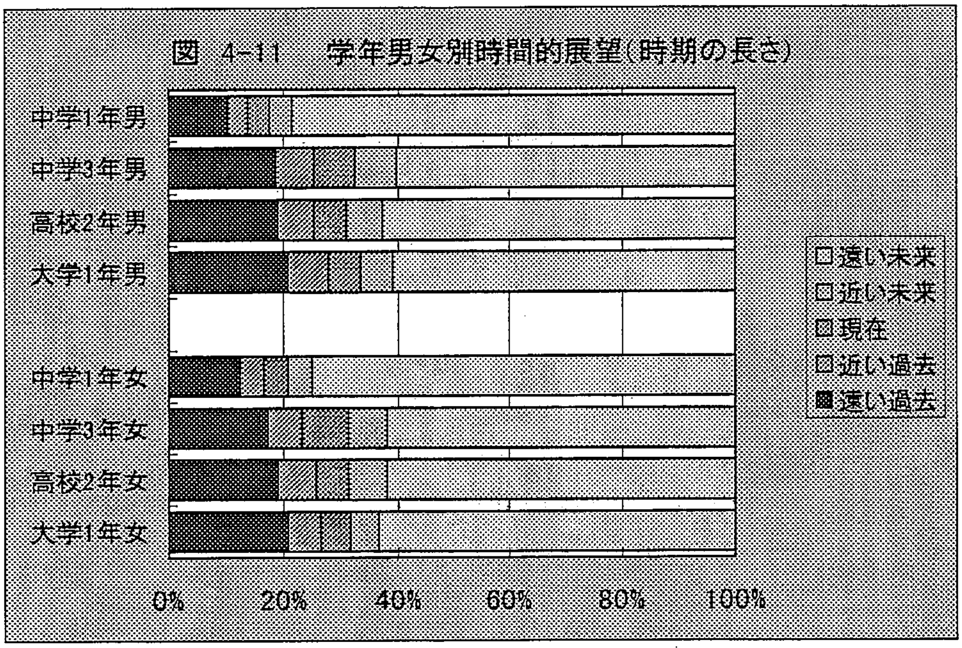
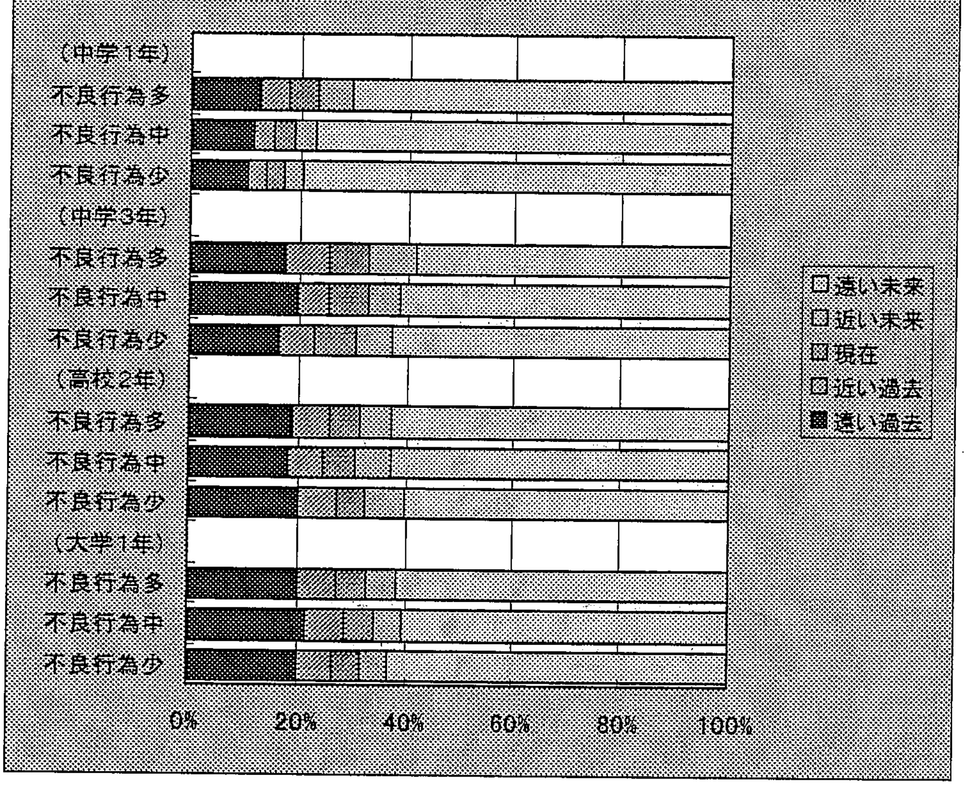


図４－１１に学年男女別に５つの時期の長さの平均を示した。当然予想されるように学年があがるにつれ過去の割合が増大し、現在が右に移動している。逆に未来についてみると中学１年生では、未来の長さが長くなっているが、むしろ注目すべきは、中学３年生以降、過去が長くなっているにもかかわらず未来の長さが変わっていない点かもしれない。これは中学３年生で相対的に現在が長くなっているためである。時期の長さを少年たちがそれぞれの時期をどの程度重視しているかを反映してると考えることができるとすれば、中学３年ではより現在が重視されており学年が上がるにつれて未来がより重視されるようになっていると考えることができるかもしれない。出来事の数についても長さとほぼ同様の結果が得られた。

図 4-12　不良行為別時間的展望(時期の長さ)



不良行為と時間的展望との関連をみるために不良行為別の時期の長さの平均を図４－１２に示した。中学生においては、不良行為の多い少年ほど現在が右側にずれ、過去が長く、未来が短くなっている。暦年齢が一定であるので、時期の長さがどの時期を重視してるかをよりよく反映していると思われるが、そのような観点からすれば、不良行為の多い中学生では相対的に未来より過去が重視されており、未来への展望が得にくくなっているのではないかということが示唆される。不良行為の多い少年において、特に職業達成を重視し

ながらその効力感を持ち得ないでいるという結果をあわせて考えると、そうした効力感の低さのために、将来の展望をもちにくくなっており、そのことが現在の反社会的な行動傾向と結びついているのではないかと考えられる。